窓辺で

必要な情報を得るために、図書館や書店に行くと、まず、知りたいことがどの本に書かれているかを見つけなければなりません。それは、自然の現象なのか、人間の営みなのか、あるいは想像の産物なのか、つまり、さがしている情報が、限りなく広い知識の世界の中でどんな位置にあるのかをまず考えなければなりません。本が置かれている場所は、その情報の位置をも表しているのです。一旦本の中で必要な記事を見つけ出すことができれば、その記事が書かれている場所によって、そのこととほかの様々なことがらとの関係が分かります。

本で情報を検索することは、たくさんの思考の過程を必要とする作業です。書店や図書館で店員や司書の助けを借りるとすれば、人と人とのコミュニケーションも必要です。本で調べることは目だけでなく、耳も、口も、手も、足も、全身を使ってする仕事なのです。

このような経験の中で、子どもたちは、断片的な情報を他の情報との関連の中に位置づけ、文字や映像だけで表しきれないものを想像力で補って、それを深く理解することができるようになります。また、誤った情報や、役に立たない情報を見分ける力もつけてきます。

こういう時代だからこそ、本の重要さを再認識することは、非常に時宜にかなったことなのです。本に親しむことは、いっそう大切になってきています。小学校で、子どもたちが長い時間コンピューターの前で過ごすようなことは、もはや時代遅れだと言っても過言ではありません。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
E メール：kokusai_info@keimei.ac.jp

◆ 外国に住む時にも

また、めまぐるしく時間が過ぎていく時代の中でも、本によって、心の静けさを保ち、多くの人の思索や感情にふれる喜びを得ることができます。子どもたちには、その喜びを体験させ、限りなく広い本の世界への扉を開いてやらなければなりません。子どものときに本に親しむことは、一生を豊かにすることになるのです。

言葉の違う新しい環境に入った時にも、本は大きな助けになります。英語の出来ない子がアメリカの学校に入ったとすると、英語で授業を十分に消化できるようになるまでには、数年かかることを覚悟しなければならないでしょう。それまでの間、英語で理解したり、表現したりできることは、本来の自分の言葉でできることに比べるとかなり幼稚なレベルであることは避けられません。その時に自分の得意な言葉で本を読むことは、発達段階にふさわしい知的な刺激を得ることになります。自分で読書を楽しめるようになっていれば、成長するにつれて内容の濃い本が読めるようになり、外国にいても、日本語の語彙や表現を増やしていくこともできます。外国に住んだために、ほかの楽しみが少なく、かえって日本語での読書の量が増えて、日本語の読み書きの力がついたと言う人もいます。日本語の力をしっかりつけておくことが第二言語の学習にも非常に役立つことはいうまでもありません。かなや漢字で書かれ、しかも（アメリカの子どもの目で見れば）反対側からめくるような難しい本を読んでいるということで、友だちに一目おかれるようになったという子もいます。そのうちに、英語でもアメリカの友だちと同じような本が読めるようになってくれば鬼に金棒ということになるでしょう。

啓明学園の新しい図書館には、DOMVS VERITATIS（真理の部屋）という名前がつけられました。この図書館のおかげで、啓明の子どもたちが、いっそう賢く、いっそう心豊かに育っていくことはまちがいありません。私たちは、その子どもたちをしっかり応援していきたいと思っています。

＊啓明学園の様子は、ウェブサイト www.keimei.ac.jp でごらんください。

コンピュータと本の関係。コンピュータの時代だといわれているからこそ「本の重要さを再認識する」べきだ、との佐々先生の主張に賛成します。

第一言語が定着する前に、読書を通してしっかりした「読解力」を身につけないと大変です。インターネットを通しての情報検索で、文章をじっくり読み理解する力が身につくとは思えません。その読書をする力が、高学年になってからのアカデミックな力の基礎になるのです。

アメリカの学校では、本が読めないと勉強になりません。日本では？